

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770012

研究課題名(和文)ポスト・ヒューマン時代における「他者の倫理」：レヴィナスと現代仏語圏倫理学研究

研究課題名(英文)"Ethics of the other" at the age of post-human: research on Levinas and the contemporary french ethical thought

研究代表者

渡名喜 庸哲 (TONAKI, Yotetsu)

慶應義塾大学・商学部(日吉)・准教授

研究者番号：40633540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、20世紀フランスで活躍した哲学者であるエマニュエル・レヴィナスの倫理思想に焦点を当てた研究を行なった。レヴィナス哲学の意義についてはこれまで多くの研究があるが、主に哲学史的な観点からのものが多かった。これに対し本研究では、科学技術が進展し従来の「人間」概念が名実ともに変容し「ポスト・ヒューマン」という概念が提示される現代的な文脈のなかで、レヴィナスおよび現代仏語圏の倫理思想がどのように意義を有するかを検討した。国内外での文献収集・精読、専門研究者からのヒヤリング、また現代の幾人かの思想家との比較研究を行なった。その成果は2017年中に単行本として公開予定である。

研究成果の概要(英文)：In this study, we focused on the ethical philosophy of Emmanuel Levinas, a philosopher in the 20th century France. There have been many studies on the significance of Levinas' philosophy, but, in this research, this significance was examined in the contemporary context where the science and technology advances and the traditional "human" concept has transfigured both name and reality to the point that the concept of "post-human" is presented. We gathered and read the literature on this subject both in Japan and in France, interviewed from specialists of related domains, and compared with several contemporary thinkers. The results will be released as a book in 2017.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：レヴィナス ポスト・ヒューマン 倫理学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまでレヴィナス哲学研究を中心に、現代哲学・社会思想史の分野で研究を進めてきた。特に、レヴィナス哲学の中心をなす「倫理」という概念が、「政治」などそれと原理を異にする概念とどのような関係にあるのか、また思想的文脈や同時代の比較思想的布置のなかでその哲学がどのように位置づけられるかをめぐって研究を進めてきた。研究開始時には、1) これまで未公開の資料の分析や国内外の最新の研究成果に基づくレヴィナス研究の刷新、2) 「破局的」な状況においてこのレヴィナスの思想がどのように発展したかという二点をめぐって研究を進めていた。

今日、レヴィナス研究は国際的に見て飛躍的に進んでいるが、その特徴として、かつてのような「他者」や「倫理」という問題群を中心的に取り扱うものから、これまで取り上げられてこなかった哲学者との比較研究、美学やエロス論などの主題への注目等が確認される。そのなかで本研究が「他者の倫理」という研究史的にはいささか古い主題をあえて取り上げなおすのは、それが本来持っていたインパクトを現代の文脈に置きなおして再考すべきであると考えからだ。

これまで Ombrosi (2007) や村上 (2012) などに示されているように、レヴィナス思想は、「ショアー」という破局的な出来事において、ある意味で「人間」という概念の限界が垣間見られたことを出発点として練り上げられたと言ってよい。そこから彼は「他者の倫理」という思想を提示したのである。現在遂行中の科研費研究課題「破局的経験から共生の倫理へ」はこの過程を最新資料を取り入れて明らかにすることを旨としたものである。

だが、そのなかで、レヴィナスの提示した思想は、多くの点で現代的な意義を有しているとはいえ、それが全体として呈示した「人間」概念だけをもってしては、現代的な要請にこたえるには十分ではないように思われた。レヴィナスがある意味で「人間中心主義的」な姿勢を崩さなかったことは、彼の倫理思想の強みであるとも言えるが、他方で、そこにシステム論的な発想、技術思想的な発想が欠けていることも否めないように思われる。要するに、現代のように科学技術が高度に発展し、産業社会も複雑化し、「人間」の存在様態それ自体が具体的な変容を見せているなかで、レヴィナスの言う「他者の倫理」はいかなる意味を有しているのか。そしてもしそれが限界を有するならば、それをどのように乗り越えるべきか。これが検討すべき点として浮かび上がってきた。

この問いには、次のような側面もある。申請者はレヴィナス研究に平行して、とりわけ東日本大震災以降の状況を受け、「カストロフィ」概念の検討という観点から研究を進めている。その観点から現代フランスにおけ

る関連する分野の文献を調査するなかで、ここでは上記の「人間」概念の変容をめぐる問題に対し多くの有意義な議論があることが判明した。そこには、日本においてはあまり紹介されていないが、いっそう細かい広範な分析を施すに値する考察が多く認められる。これらは、レヴィナス研究の観点からも直接的・間接的な思想的連関があり、そこから多くの示唆を得ることで、より有機的な研究を推進できると思われた。

2. 研究の目的

本研究は、20 世紀フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスが提示した「他者の倫理」の思想を出発点とし、その後のフランスで展開された倫理思想が、現代社会における科学技術の進展や産業構造の変化といった状況に照らして、どのような意義を有するのか検討することを目的としている。とりわけ、「ポスト・ヒューマン」という発想が現実味を帯び、「人間」概念そのものの変容が迫られているように思われるなか、そのことの意味を批判的に検討するために、レヴィナス思想に加えて、国内外ではあまり注目されてこなかったそれ以降のフランス倫理思想が提示した考え方を積極的に取り入れ、現代的課題に応える倫理学的視座の構築を目指す。

3. 研究の方法

本研究は、基本的に、哲学・倫理学の分野の研究として、公開された文献の収集・分析を通じてなされる単独研究である。ただし、専門分野および関連領域の最新の研究成果に関する意見交換および国際的な研究者ネットワークの構築のために、適宜、国内外でのヒヤリング、ワークショップやシンポジウム等に積極的に関わっていく予定である。

4. 研究成果

本研究1年目は、主として研究課題に関連する研究図書・資料の収集および分析と、その成果公表にあてられた。

関連図書・資料に関しては、国内で調査・収集を続けたほか、8月にフランス(パリ市)への出張を行ない、当地の各図書館・専門書店において調査・収集を行なった。また、この出張を利用し、フランスの関連分野の研究者との意見交換も行うことができた。

研究内容については、第一に近年公開の『レヴィナス著作集』の精読・翻訳作業を進めた(同書は2016年に単行本として公開された)。また、レヴィナス研究会との共催で定期的に研究会を開催し、国内の若手研究者との意見交換を行なった。

その成果は以下のとおりである。第一に、9月に行なわれた日仏哲学会・レヴィナス研究会共催シンポジウムにおける口頭発表で公表した。そこでは、『レヴィナス著作集』第一巻の精読に基づき、そこから戦後のレヴィナス哲学の展開を再解釈する可能性を指

摘した。第二に、10月に行なわれた脱構築研究会主催のシンポジウムにおいて、ジャック・デリダとレヴィナスとの接点に関する発表を行なった。第三に、所属する大学内の紀要において、レヴィナスの「人間主義」をあらためて考え直すことを主眼とした論文を執筆した。この論文は、主著『全体性と無限』の読解に基づき、レヴィナスにおける「人間」概念の外延について再考を求めるものであり、当研究課題を今後いっそう展開してゆくための土台となるものである。

本研究2年目の研究活動としては、第一に、2015年5月15日に、ニース大学名誉教授で物理学・科学哲学を専門とするジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロン氏の来日に合わせ、研究会を開催した。豊橋技術科学大学講師の中村大介氏とともに、現代の科学哲学の課題についての最新の知見を提供いただき活発な議論を行なうことができた。第二に、8月8日に、アーレント研究会シンポジウム「アーレントと現代の科学・技術」にて、ハンナ・アーレントとギュンター・アンダースに関する発表を行った（その後、学会会報にて公開された）。第三に、8月10日から31日にかけて、フランス・パリに出張し、国立図書館・専門書店等で最新の研究文献を調査・収集・精読することができた。第四に、9月20日の第10回ハイデガー・フォーラムにて、レヴィナスとハイデガーについての研究発表を行い、国内の専門家からの多くのコメントを得た（論文は2016年度に公開）。第五に、1月30日に研究会を主宰し、横地徳広氏の近著『超越のエチカ ハイデガー・世界戦争・レヴィナス』をめぐる公開討論会を実施した。国内から各分野の研究者を招聘し、有益な議論の場を持つことができた。第六に、2月に早稲田大学および中央大学においてレヴィナスと戦争の問題について発表した。

上記のほか、レヴィナスに関する研究成果として、斎藤慶典氏・小手川正二郎氏とともにレヴィナスの伝記として最も信頼できる著作であるサロモン・マルカ『評伝レヴィナス 生と痕跡』を翻訳出版した。また関連する文献の書評を3本執筆した。現代仏語圏倫理学に関しては、その第一人者とも言えるジャン＝ピエール・デュピュイについて、共編著『カタストロフからの哲学』を公開した。

本研究3年目は、本研究課題の最終年度にあたり、これまでの研究のとりまとめおよび公表を中心に行った。研究遂行に必要な書籍の購入を行なったほか、8月にフランスに海外出張を行い、現地で文献調査を行うとともに、主にフランス国立図書館において研究のとりまとめ作業を行なった。日本国内では、これまでの研究についての資料整理および論文執筆を行った。研究成果については、第一に、レヴィナスにとって最も重要な参照・批判先であるハイデガーについて、未公開資

料等の新資料を用いて解明をめざした論文を公開した。この未公開資料については、翻訳作業を進め、その一部を共訳のかたちで公開した（『エマニュエル・レヴィナス著作集2: 哲学コレージュ講演集』）。残りの第3巻についても、翻訳をほぼ完了しており、来年度に公開を予定している。また、レヴィナス思想の要の一つである「ユダヤ性」の問題については、デリダによる当該問題を扱った著作『最後のユダヤ人』の翻訳を公開し、解説を発表した。本研究課題のもう一つのテーマである「ポスト・ヒューマン」をめぐる問題については、これに関わる現代の科学技術の哲学についてフォローした。その内容・成果としては、レヴィナスと同時代の20世紀ドイツの思想家らが重要だが、まずギュンター・アンダースについては原子爆弾についての倫理的考察に関する論考を『現代思想』を発表、ハンナ・アーレントについては科学技術振興機構においてベルギーにてアーレント思想を科学技術政策との関係で論じるニコル・ルワンドル氏との対話を行ない、ハンス・ヨナスについては日本におけるヨナス研究者である戸谷洋史氏より専門知識の教示を得た。また、日本の科学研究の現状については池内了氏に講演をしていただき、専門知識の教示を得た。これらの成果の一部はフランス専門誌にて仏語論文を公開した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計7件)

Yotetsu Tonaki, "Günther Anders et le Japon. Penser le post-humain", Europe, no, 1058-1059-1060, p. 267-280, juin 2017. 査読無
渡名喜庸哲「ギュンター・アンダースのヒロシマ 政治でも、道徳でも、ヒューマンズでもなく」『現代思想』44巻15号、96-108頁、2016年8月。査読無。

渡名喜庸哲「被投性が繁殖性か：レヴィナスのハイデガー批判はそもそも何を狙っていたのか」、『ハイデガー・フォーラム』10号、91-103頁、2016年5月。査読有。

渡名喜庸哲「アンダースとアーレント—科学・技術をめぐって」『Arendt Platz』1号、3-8頁、2016年1月。査読無。

Yotetsu Tonaki, "La banalité résiliente des catastrophes : d'Après Fukushima de Jean-Luc Nancy", Rue Descartes, no. 88, p. 66-83, 2016. 査読無。

渡名喜庸哲「動物以上、人間未満」レヴィナスにおける「エートスの学」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』60号、205-229頁、2015年3月。査読無。

渡名喜庸哲「エマニュエル・レヴィナス「捕囚手帳」の射程」『京都ユダヤ思想』5号、43-62頁、2015年。査読有。

〔学会発表〕(計9件)

渡名喜庸哲「エロス、文学、災厄：バタイユ、レヴィナス、ナンシー」、ジョルジュ・バタイユ生誕120年記念国際シンポジウム、慶應義塾大学・東京都港区、2017年4月23日

渡名喜庸哲「コメント」、国立研究開発法人科学技術振興機構システム・情報科学技術セミナー「EU Onlife とアーレント」、国立研究開発法人科学技術振興機構・東京都千代田区、2017年2月27日

渡名喜庸哲「レヴィナスと戦争」、中央大学人文科学研究所公開研究会、中央大学・東京都八王子市、2016年2月6日

渡名喜庸哲「レヴィナスから」、早稲田大学「信頼社会」研究シンポジウム「テロリズムを考える—デリダ、ドゥルーズ、レヴィナスの哲学から」、早稲田大学・東京都新宿区、2016年2月2日

渡名喜庸哲「「被投性」か「繁殖性」か：レヴィナスのハイデガー批判はそもそも何を狙っていたのか」、ハイデガー・フォーラム第10回大会、関西学院大学・兵庫県西宮市、2015年9月20日

渡名喜庸哲「アンダースとアーレント、科学技術をめぐって」、アーレント研究会第14回シンポジウム「ハンナ・アーレントと科学技術」、一橋大学・東京都国立市、2015年8月8日

渡名喜庸哲「ジャン＝ピエール・デュピュイとカタストロフ論的展開」、シンポジウム「ジャン＝ピエール・デュピュイの思想圏：カタストロフ、科学技術、エコノミー」、慶應義塾大学・神奈川県横浜市、2014年12月13日

渡名喜庸哲「デリダはレヴィナス化したのか」、脱構築研究会ほか主催ワークショップ「デリダ×ハイデガー×レヴィナス」、早稲田大学・東京都新宿区、2014年10月11日

渡名喜庸哲「草稿から見える新たなレヴィナス像：『レヴィナス著作集』刊行をめぐって」日仏哲学会・レヴィナス研究会主催ワークショップ「レヴィナスは、今日?」、東京大学・東京都目黒区、2014年9月12日

〔図書〕(計7件)

クロード・ルフォール著、渡名喜庸哲ほか訳『民主主義の発明 全体主義の限界』勁草書房、2017年1月、416頁。

齋藤元紀、澤田直、渡名喜庸哲、西山雄二共編『終わりなきデリダ：ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』、法政大学出版局、2016年11月、326-249頁

ジャック・デリダ著、渡名喜庸哲訳『最後のユダヤ人』、未来社、2016年10月、145頁

エマニュエル・レヴィナス著、渡名喜庸哲ほか訳『エマニュエル・レヴィナス著作集2：哲学コレーージュ講演集』法政大学出版局、

2016年7月、426頁

サロモン・マルカ著、渡名喜庸哲ほか訳『評伝レヴィナス 生と痕跡』慶應義塾大学出版会、2016年2月、442頁

渡名喜庸哲、森元庸介共編『カタストロフからの哲学：ジャン＝ピエール・デュピュイをめぐって』、以文社、2015年10月、41-100頁

エマニュエル・レヴィナス著、渡名喜庸哲ほか訳『レヴィナス著作集1：捕囚手帳ほか未刊著作』法政大学出版局、2014年4月、572頁

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

6. 研究組織
(1)研究代表者
渡名喜 庸哲 (TONAKI, Yotetsu)
慶應義塾大学・商学部・准教授
研究者番号：40633540

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし